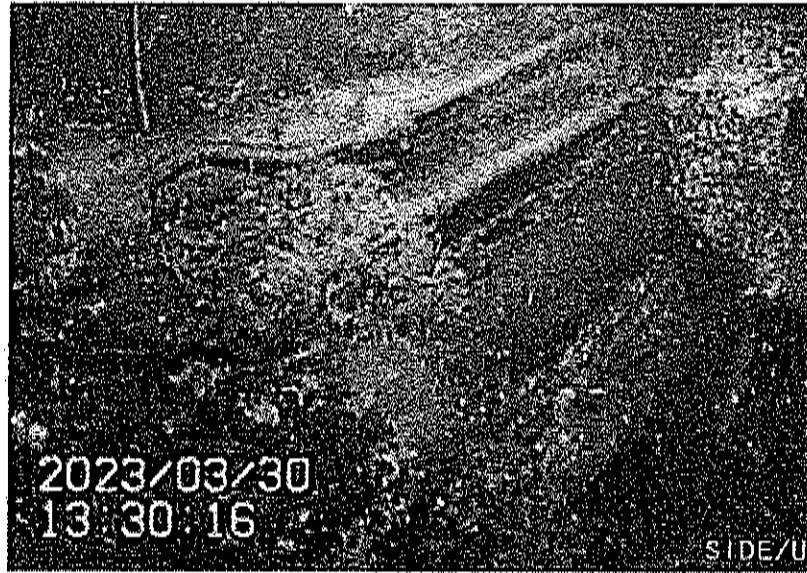


格納容器の調査中断

福島第一1号機ロボット進めず

東京電力は3日、炉心溶融事故を起こした福島第一原発1号機の



水中ロボットが原子炉直下から上方を撮影した画像。制御棒駆動機構に関連する構造物が脱落しています。右上に、かたまり状の物体も見えています＝3月30日（国際原子力研究開発機構（IRID）提供）

原子炉格納容器の内部調査について、投入した水中ロボットのケーブルが引っ掛かって進めなくなってしまうため、撮影を予定していた領域の一部を断念し、調査を終えたと発表しました。

今回の調査は3月28日に開始。原子炉圧力容器を支えている円筒形の土台（ペDESTアル）の内側に、水中ロボットを投入してペDESTアル内壁の損傷状況を初めて調べました。水中ロボットは30日までに内壁の全周の半分強を調べましたが、31日にケーブルが引っ掛かって進めなくなり、残りの領域の調査を断念。4月1日に水中ロボットを引き上げて調査は終わりました。

ペDESTアルは鉄筋コンクリート製で、外径7.4メートル、内径5.5メートル。これまでの調査で、外壁の一部や内壁の広範囲の領域で、コンクリートが溶けて鉄筋がむき出しになっている様子が確認されました。東電は、デブリ（溶け落ちた核燃料）から放射されると考えられる中性子線の測定も予定していましたが、ペDESTアルの開口部のみ実施し、ペDESTアル内部での測定を実施する前に調査を中断することになりました。

30日の調査では、水中ロボットが原子炉直下から上方を撮影。制御棒駆動機構の一部とみられる構造物が脱落して下方に落ちてきている様子や、かたまり状の物体が垂れ下がっている様子が確認されました。